

〔A類国語コース、 B類国語コース 対象〕

学校推薦型選抜 問題

令和7年度

小論文

(一枚目)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本語学・日本語教育学の庵功雄さんが著した『やさしい日本語』は、簡略化された〈やさしい日本語〉の概要を示しつつ、社会におけるその重要性を指摘しており、本稿の論点にとって非常に参考になる著書だ。

そこで提唱されている〈やさしい日本語〉とは、簡単にまとめるならば、(1)語彙を絞る、(2)文型を集約するなどして文法を制限する、(3)難しい表現を噛み砕く、といった方法により、特定の障害のある人や在日外国人などにとっても習得や理解がしやすいように調整された日本語のことだ。

この〈やさしい日本語〉は、災害時における行政やメディアによる広範な情報発信という用途のほか、平時においても、多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語として用いることによって、社会的包摂や多文化共生につながる事が目指されている。具体的には、たとえば、

「地震直後に必要になる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も直前に購入しておきたい」という日本語ネイティブ向けの防災の呼びかけは、

「地震のすぐあとのための水や食べ物はとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク(水を入れるもの)も買ってください」といった文章に言い換えることが推奨される(『やさしい日本語』一八七―一八八頁)。

同書中で紹介されているエピソードのなかで特に印象深いのは、聴覚に障害のある一人の男性のエピソードだ。彼はろう学校で必死に日本語を学んだが、彼の母語である日本手話が日本語と大きく文法体系が異なることなどもあり、敬語の使い分けや助詞の使い方などはうまく習得できなかった。就職後、彼が「てにをは」の不自然な文―たとえば、「仕事が終わらせる」など―を言ったりすると、周囲の同僚からかわれたり、蔑まれたりするようになり、相当の辛苦を味わったという(同書一三八―一三九頁)。同様のつらい思いは、日本で働く在日外国人なども少なからず経験していることだろう。

日本語を母語とする者が高度に使いこなしているものを皆が従うべき「規範」として立て、そこから逸脱した使用を嘲^{あざけ}ったり厳しく注意したりするのは、社会的包摂や多文化共生からは遠ざかるばかりだろう。むしろ、「日本で安心して生活するために最低限必要な日本語」(同書八六頁)を基準に皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、特定の障害のある人や在日外国人などが「日本の中に自らの「居場所」を作る」(同書七三頁)ことにつながる。

以上の指摘は非常に重要だ。〈やさしい日本語〉を知恵を絞って構築し、日本語教育の現場などに普及させて日本語習得のハードルを下げることは、たとえば移民など、この国の地域社会で生きていく必要のある人々にとっても、また、彼らと共生していく日本語ネイティブの住民にとっても有益であることは間違いない。

さらに、同書では、〈やさしい日本語〉はそのほかの点でも日本語ネイティブ自身にとって大いに恩恵があると指摘されている。私も含め、日本語ネイティブはしばしば、「適当に言っても通じる」というある種の「甘え」(同書一八四頁)のなかにいる。たとえば、企業でも官庁でも大学等々でも、自分でもよく分かっていない曖昧な業界用語を符丁のように用いて、仲間内でうなずき合って過ごす、というのはよく見られる光景だ。また、無駄^{むだ}に難しい言葉をこねくり回して立派な話をしているように見せかける、というケースもしばしばあるだろう。

そうした甘えや幻惑から脱して、自分とは異なる背景を有する相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、多くの場面でコミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。

ただし、〈やさしい日本語〉が日本語を、それ自体の規範になつてはならない。私はこの一点に関してのみ、〈やさしい日本語〉の推進に対して一抹の懸念を抱いている。

たとえば同書では、日本語ネイティブにとっては拙^{つたな}く思えるような日本語も一種の「方言」ないし日本語のバリエーションであって、たとえば在日外国人がそうした日本語で「大学のレポートや会社のビジネス文書を書いて受容すべきだ」(同書一〇七頁)と言われている。もしもこの主張が、あらゆるレポートやビジネス文書についての規範的主張として展開されているのだとしたら、それには明確に反対

学校推薦型選抜 問題

令和7年度

小 論 文

(二枚目)

したい。

大学教員としての私自身の経験でいえば、たとえば授業に出ている留学生と話し、その人の母語が日本語ではないと了解した場合には、その学生が日本語で書いたレポートについては、基本的に表現の部分に関する配慮を行っている。誤字脱字が多かったり、「てにをは」がおかしい箇所があったり、単語の選択に疑問があったりする場合でも、おおよそ目を瞑こむっている。そして、内容の方を重視して精査している。他方で、日本語ネイティブの学生については、そうした表現上のおかしさは減点の対象にしている。

私は、これが不公平な処置だとは思わない(ネイティブと非ネイティブの境界線が曖昧であるなど、微妙なケースは存在するけれども)。レポートの提出や採点といった一連の過程は、単位認定などのための評価の場であると同時に、教育の場でもある。それゆえ、採点の基準も、個々の学生の力を伸ばす方向で考えるべきであって、機械が採点するのではないのだから、画一的な基準で片付けるべきではない。ケースバイケースで、教員がそのつど頭を悩ませながら考えるべき事柄だろう。

たとえば私は、非日本語ネイティブの留学生が日本の大学院への入学を志望しており、将来的に日本語で論文を書く意志がある場合には、誤字脱字や「てにをは」の乱れなどの表現上おかしい部分について、学生の希望や習熟度にに応じて指摘するようにしている。というのも、「てにをは」は必ずしも些細なものではなく、誤読を引き起こさない正確な文章を書く際に、しばしば非常に重要なポイントになるからだ。

ビジネス文書に関しても、同様にケースバイケースと言えるだろう。「てにをは」や単語の選択などが重要なケースもあれば、そうでないケースもある。当該の文章がどのような目的で書かれ、どのような場で読まれるか等々によって、日本語ネイティブがそれを受容すべきかどうかは当然変わってくるのである。

また、たとえば専門家の繰り出す表現がときに難しいものになるのは、難しい言葉を無駄にこねくり回しているから——本当は分かりやすく言えるのに、敢えて好きこのんで難しい言葉を用いているから——というケースも確かにあるが、そればかりではない。

医学であれ、工学であれ、法学等々であれ、専門家が扱う問題は、まさにその道の専門家が必要であるほどに、そもそも難しい。複雑な問題があるがままに正確に捉え、解決の方途を正確に言い表そうとするならば、その表現はおのずと複雑で、繊細なものになっていく。

もともと、専門家は常に難しい言葉の使用に終始していればよいというわけではない。専門家と市民との十分なコミュニケーションは本当に重要であり、そこでは難しい言葉はしっかりと噛み砕かれるべきだ。ただし、その前にまずもって、専門の領域において突き詰めた思考と表現が必要なのだ。

また、種々の社会問題の込み入った中身に分け入ったり、人間の心理の微妙な装ひたを分析したり、古来受け継がれてきた世界観や価値観の内実を浮き彫りにしたり、といった場合にも、慎重に繊細に言葉を練り上げることが必要となる。そうやって腐心することではじめて表現できることがある、その表現によつてはじめて見えてくるものがあるのだ。そして、そのような実践が可能であるためには、言語という巨大な文化遺産の奥深くにアクセスし、その膨大な蓄積ほうを利用しつつ、変更を加えたり新たなものを付け加えたりしていく道が、私たちに確保されていなければならない。つまり、へやさしい日本語ではなく、前掲書で言うところの「精密コードとしての日本語」(同書二〇九頁)を用いることが、そこでは可能でなければならない。

しかもそれは、各分野の専門家や、あるいは作家といった職業の人に可能であればよい、というものではない。(精密コードとしての日本語)の使用が私たちのうちのごく一部に限られてしまえば、そこに大きな知的格差や、あるいは権威・権力の偏りが生まれ、日本語は非民主化されてしまうことになる。また、そもそも、過去の言葉の蓄積を理解できる人が少なくなれば、その分だけ遺産自体が先細り、朽ちていってしまうことになる。

要するに、言葉は常に伝達のための手段であるわけではなく、しばしば、言葉のまとまりをかたちづくること——表現を得ること——それ自体が目的となる場合がある、ということだ。その点で、「日本語母語話者にとって最も重要な日本語能力は、「自分の考えを相手に伝える、相手を説得する」ということである」(同書一八二頁)という、同じで繰り返されている主張は、言葉の働きの一方を強調しすぎているように思われる。もちろん、その種のコミュニケーションスキルもきわめて重要だ。しかし、これがほかの何よりも重要であるというわけではない。すなわち、その伝えるべき「自分の考え」それ自体を生み出すことも、同じくらい重要な言葉の働きなのである。

それから、言語の簡素化と平明化を推進することが、必ずしも言語の民主化につながるとは限らない、という点も強調しておくべきだろう。

学校推薦型選抜 問題

令和7年度

小 論 文

(三枚目)

う。

多様な人々の間で用いられる共通言語を意図してつくり出す際には、一般的に、語彙と文法を制限して学習や運用のコストを減らすという方法がとられる。しかし、人工的な共通言語のこうした特徴は、たとえばジョージ・オーウェル(一九〇三―一九五〇)の小説『1984』に登場する、全体主義国家の公用語「ニュースピーク」の特徴と似通っている。

多くの言葉は、物事に対する特定の見方、世界観、価値観といったものを含んでいる。(たとえば、「土足で踏み込む」、「かわいい」、「しあわせ」など。)言葉は思考を運ぶ単なる乗り物ではなく、ある種、「思考が言語に依存している」(『1984』四六〇頁)とも言えるのである。そして、件くだんの全体主義国家は、言語のこの特徴を最大限に利用している。すなわち、旧来の英語を改良した「ニュースピーク」なる新しい言語を発明し、その使用を強制することによって、国民の表現力や思考力を弱め、全体主義に適う物事の見方に嵌はめ込むのである。

ニュースピークの具体的な設計思想は、文法を極力シンプルで規則的なものにする事、そして、体制の維持や強化にとって不要な語彙を削減し続けることである。小説の登場人物の口からは、「年々ボキャブラリーが減少し続けている言語は世界でニュースピークだけだ」(同書八二頁)とも語られている。たとえば、「good(良い)」という言葉の程度を強めるのに「excellent(素晴らしい)」とか「splendid(見事)」といった言葉があるのは無駄であって、「plusgood(＋良い)」とか「doubleplusgood(＋＋良い)」という言葉で十分とされる(同書八一頁)。作者のオーウェルは、小説の付録として「ニュースピークの諸原理」を詳細に著しているが、そこで彼は次のようにも綴つづっている。

我々の言語と比較してニュースピークの語彙は実に少なく、さらに削減するための新たな方法がひっきりなしに考案され続けた。ニュースピークは他の言語と異なり、年々語彙が増えるのではなく、減少し続けたのである。選択範囲が狭まれば狭まるほど人を熟考へ誘う力も弱まるのだから、語彙の減少はすなわち利益であった。(同書四七三―四七四頁 ※原文を基に一部改訳)

しつくりくる言葉を探し、類似した言葉の間で迷いつつ選り取ることは、それ自体が、思考というものの重要な要素を成している。逆に言えば、語彙が減少し、選択できる言葉の範囲が狭まれば、その分だけ「人を熟考へ誘う力も弱まる」ことになり、限られた語彙のうちに示される限られた世界観や価値観へと人々は流れやすくなる。ニュースピークとはまさに、その事態を意図した言語なのである。

語彙と文法の制限によって簡素化・平明化を実現したニュースピークは、淀とどみのない滑らかなコミュニケーションを人々に可能にさせるが、しかしその実態は、人々がこの言語によって飼かい慣らされ、表現力・思考力が弱まり、画一的なものの味方や考え方に支配されることを意味していた。

もちろん、これは小説の中の話であり、ある種の思考実験に過ぎない。また、へやさしい日本語はニュースピークのようなもの、と言いたいわけでもない。ニュースピークは全体主義に適わない世界観や価値観を表現する言葉を積極的に廃止し、「ありとあらゆる他の思考様式を完全に排除すること」(同書四六〇頁)を明確に意図して設計されている。その一方でへやさしい日本語は、先に確認したように、地域に住む人々の多様な背景を尊重し、相手の立場に立ったコミュニケーションを推進することを目的としている。それゆえ、人々はへやさしい日本語の使用によって、画一的なものの見方どころか、多角的なものを見方を獲得できる可能性が大いにあるだろう。

しかし、仮にへやさしい日本語が全面化するとすれば――つまり、いかなる場面でもへやさしい日本語の使用が推奨されたり要求されたりするとすれば――その際にはこの言語はニュースピーク的なものに近づくことになる。誰か(言語学者? 国の機関?)が意図して減らした語彙と表現形式に従ったかたちであらゆる報道がなされたり、あらゆるレポートや論文が書かれたりするようになれば、どのような語彙や表現形式が制限されるかに応じて、思想的な偏りが生まれたり強まったりするだろう。また、たとえば価値中立的な言葉や政治的に中立的な言葉だけを用いる、といった方針を採ったとしても、言うまでもなくその方針自体が、一種の思想的な偏りを示すものとなる。

そして、それ以前に、〈精密コード〉としての側面を失った日本語は、それを使用する者の表現力や思考力を著しく弱めてしまうことだろう。

学校推薦型選抜 問題

令和7年度

小 論 文

(四枚目)

たとえば、次のような想像をしてみよう。あるとき日本に専制的な国家が誕生して、今後はニュースピークならぬ「新日本語」を公用語として定めることを思いつく。そして、言語学者たちに対して、旧来の日本語とは異なり語彙も文法も極力シンプルなものになるように「新日本語」を設計せよ、と命じる。そこで、たとえばその言語学者たちは、「駆ける」と「走る」は本質的には同じ意味だから、今度の新しい日本語では「かじる」という一種類の言葉で済ませよう、と決定する。このひとつの決定によって、果たしてどのような影響が生じるだろうか。

注意すべきなのは、この架空の新語「かじる」は、「駆ける」と「走る」の両方の意味をもつ多義語ではない、ということである。そうではなく、「駆ける」と「走る」に共通する意味だけを抽出して「かじる」という記号列に割り当て、他の部分はすべて切り捨てる、というのが、当該の言語学者たちの方針なのである。それゆえ、もしもこの方針通りにしたとすれば、その新しい言語においては「自分の足で素早く移動する」という類いのことを意味する単語「かじる」だけが残り、「駆ける」や「走る」というそれぞれの言葉に含まれていた他意味が失われることになる。すなわち、「駆ける」であれば、

「馬に乗って走る」、「飛ぶように速く走る」、「奔走する」

といった意味であり、「走る」であれば、

「通って続く(海沿いに道が走る、東西に山脈が走る、など)」、「ある方向に強く傾く(悪事に走る、感情に走る、など)」、「スムーズに流れる(筆が走る、今日のピッチャーは球がよく走る、など)」、「瞬間的に現れる(稲妻が走る、痛みが走る、むしずが走る、など)」といった意味である。また、「駆けずりまわる」、「駆けつける」、「駆けめぐる」、「駆け出し」、「駆け落ち」、「走り書き」、「小走り」、「使い走り」、「突っ走る」、「才気走る」、「口走る」、等々、それぞれの言葉が他の言葉と結びつくことでもつ多様な意味も、「かじる」では担うことができない。

「駆ける」と「走る」を廃止して「かじる」に統一するように、類似した言葉を新しい単一の言葉に置き換えていけば、その「新日本語」の語彙は、旧来の日本語よりも遙かにコンパクトなものになるだろう。それゆえ、学習やコミュニケーションのコストも減るだろうし、類似した言葉の中からひとつを選び取る手間もなくなるだろう。しかし、個々の言葉から延びているはずの広がり、奥行きも、同時に断ち切られてしまうことになる。

自然言語の語彙の複雑さや曖昧さは、無駄で不要なものなどではない。自分たちの知識なり発想なりを優りようがに凌駕するほど豊かな語彙の蓄積があること、そして場合によっては、言葉を新たに造り出したり、外来語を取り入れたりする創造性や柔軟性をもつことは、私たちが受け継いでいる〈生ける文化遺産〉としての自然言語の本質的な特徴なのである。

もちろん、この「新日本語」も〈やさしい日本語〉ではない。しかし、社会的包摂や多文化共生という目的に資する〈やさしい日本語〉は、まさにその素晴らしい特徴のゆえに道徳的・倫理的に推奨され、暗に規範化される可能性も否定できない。すなわち、地域社会やマスメディアなどの公共的な場において、いつも皆ができるだけ用いるべき言語として位置づけられる可能性である。

(出典：『古田徹也』『いつもの言葉を哲学する』朝日新書、二〇二二年より。一部改変、省略。)

問一 〈やさしい日本語〉を推進することの功罪について、筆者の考えを四〇〇字以内(句読点等を含む)でまとめよ。

問二 あなたは、教師がことばをやさしく言い換えたり書き換えたりすることの教育上の意味について、どう考えるか。その上で、初等、または中等教育の国語科において〈やさしい日本語〉をどのように用いたらいいかについて、具体的な例を挙げて、八〇〇字以内(句読点等を含む)で述べよ。